集談会記事

第21回
東海北陸神経筋ネットワーク研究会

平成23年11月4日
東名古屋病院

一般演題

1．在宅指導用パンフレット（吸引方・栄養）を作成して

NHO東名古屋病院　神経難病病棟
副看護師長　○加藤由美子，
檜垣泰子，池田友子

介護保険制度ができたことで治療は病院，介護は施設へあるいは在宅へとむかっている．在宅介護のための指導法は当院でも以前よりあったが，書式や指導方法に違いがあり，統一されたものがなかった．

今回，在宅パンフレットを患者家族の意見も参考に入れ，新しく小冊子として作成した．

医療用語をできるだけわかりやすく，写真を多く使用し，当院で使用することが多い物品について吸引方２種，栄養法５種を作成した．

2．在宅患者の摂食嚥下機能維持の取り組み
短期入院を利用しての機能評価および訓練指導

NHO鈴鹿病院
中村智英子

嚥下障害をともなう在宅患者５名に対し，摂食機能維持を図ることを目的に，短期入院時に嚥下評価，訓練と退院指導を行った．対象は多系統萎縮症３名，筋萎縮性側索硬化症１名，パーキンソン病１名である．嚥下機能評価は，看護師が専用チェックリストに記入し，さらに言語療法士による評価および食事場面の観察を行った．これによって見出された問題点に則した嚥下訓練を実施し，退院時には患者および家族に対しての指導を行った．５名中２名には若干の改善がみられた．短期入院を利用した摂食機能評価および訓練指導は在宅神経難病患者の機能維持に有効である可能性が示唆された．

3．神経難病患者さんの在宅療養におけるソーシャルワーク支援－介護者による虐待事例から考える－

NHO医王病院福祉部地域医療連携室
○畠中暁子，中本富美，
吉田　力，小田輝実

在宅療養中の神経内科患者と関わる中で，虐待を受けていると疑われるケースが増えてきている．当院で把握した虐待ケースついて，背景にどのような課題があるか，傾向の分析とソーシャルワーク支援について報告する．

虐待を疑われる５名の対象者について，「石川県市町及び介護サービス事業者のための家庭内における高齢者虐待防止マニュアル」に沿って特徴を整理した．結果，いずれのケースも進行性の疾患であり，介護者の負担が大きくなったことが虐待につながったと考える．

そのため，介護者との面接を随時行い，負担に配慮した資源を調整していく必要がある．また，虐待を早期に発見できるよう，本人，介護者から発信される情報を見逃さず，対応していかなければならない．一方で虐待を受けていても介護者から離れず，自宅で生活していくことを希望する場合がある．本人の意向も大切にしながら，介護者も安定した精神状態で介護できる環境を提案していきたい．

4．在宅重症患者の災害対策について
－緊急時連絡カード配布から－

NHO医王病院　在宅療養対策委員会
○古本桂子，吉田　力，本東　剛，藤澤伊平次
岡野安太郎，住田晴美，神野利枝，
酒林久美子，丸箸圭子，駒井清暢

【はじめに】

当院の在宅療養患者は医療依存度の高い患者が多い．災害時のために，これら在宅患者の医療情報を共有できるよう緊急時連絡カード（以下カード）を作成し，患者と家族がどのように受けとめたかをアンケート調査した．

【研究方法】

対象患者は，当院外来，またはデイサービス・訪問サービスを利用している患者15名．緊急時や災害時に必要なカード記載項目を検討し，主治医と看護師が本人と家族に説明後配布した．配布時，災害に対する意識などを質問紙法により調査した．

研究期間は平成23年４-10月．カード配布期間は10月３-28日．

【結果および考察】

カードは，人工呼吸器・栄養・日常生活動作などの項目

とした．災害への危機感は全般的に低かったが，カードを常時患者と共におく必要性が理解できた．

【まとめ】

カードは医療依存度の高い患者・家族の災害に対する意識を高めるきっかけになった．患者・家族の不安や要望に対し，地域のコミュニティーとも連携し，病状の変化に合わせて随時修正・見直しすることが不可欠である．

5．療養介護援助への取り組み
-援助実施の確実性をもとめて-

NHO 医王病院第５病棟
○野崎堯博，江川淳子，新本美智代

【目的】平成21年度より本格的に療養介護支援が始まり，患者が何を望んでいるか調査し，患者１人１人に個別の関わりをして，患者に満足してもらい，平等なケアを提供することを目的として取り組んできた．しかし，その取り組みにおいて，様々な理由により，ケアを確実に実施することができない事例も挙がっていた．具体的改善内容をもとに，患者の QOL 向上を目指した新たな取り組みを報告する．

【対象】当院で入院されている５病棟の契約患者26名．

【方法】①天候が悪かった際に離床プランを患者が望むベッドサイドケアプランへ移行すること，または，離床プランを院内散歩等の他の離床プランに移行する．②当院の５病棟の契約患者26名に，満足度アンケート調査を行う．

【結果・考察】計画実施率が昨年よりも５％増加した94％となった．「楽しさ，リラクセーション」「援助中のスタッフの対応」「援助の丁寧さ」「要望に沿っているか」の４つの項目において満足度調査を行ったがすべての項目において，昨年度より満足度の向上が認められた．

【まとめ】患者参画型ケア計画を実施することを根底とし，さらに確実性を求めたケアを実施したことで，不満の声の減少や，療養介護援助の継続を望む声が増加した．このことからも患者の満足度が以前よりも向上したことがわかる．今後は，医療者側の理由で行うことのできなかったケアもあることから，ケア時間に余裕を持たせるなどの柔軟な対応をすること，また，個別性のあるケアを，より確実に実施し，より一層のケアの質の向上を目指すことを課題として，継続していきたいと考える．

6．多発性硬化症患者の長期入院後初めての外出支援への看護師の関わり

NHO 石川病院２病棟
○中島マサ子，宮本真理，澤村美智代

【目的】37歳で多発性硬化症を発症し，10年以上の長期入院にもかかわらず，本人・家族からの希望もないため，当院入院後一度も外出・泊をしていなかった．この患者が，今回娘の結婚式に参列するという機会ができたため，初めての外出に向けて支援を行った．

【方法】１．長時間車椅子に乗車できるためのリハビリを行う．２．車椅子に乗車した状態での排泄練習を行う．

【経過・結果】外出に向けて，１回／週，１時間の車椅子乗車を２回に増やし，車椅子乗車時間の延長ができた．ベッド上で臥床しての排泄しかできなかった患者に車椅子に乗車した状態での排泄も体位調整を行いできるようになった．結婚式には参列でき，長時間の車椅子乗車の苦痛もなく，排泄も失敗せずに家族とご馳走を食べることができ，患者は満足できたと帰ってきた．

【まとめ】これまで，外出や外泊，家族との交流について積極的な支援を行っていなかったが，今回のケースをもとに，長期患者の単調な入院生活に楽しみと目標を持つことで QOL の向上を目指し支援をしていきたい．

7．リハビリテーション介入により ADL 改善が認められた遠位型ミオパチーの１症例

○渡辺伸一（PT）[1)3)]，岩田淳（PT）[1)]，
廣田智也（PT）[1)]，横地英博（MD）[2)]，
染矢富士子（MD）[4)]

所属
1）NHO 七尾病院リハビリテーション科
2）NHO 七尾病院神経内科
3）金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻
4）金沢大学大学院医薬保健研究域保健学系

【目的】遠位型ミオパチー１症例に対し，トイレ動作能力向上を目的に運動療法を実施し，改善したので報告する．

【対象と方法】症例は65歳の女性，うつ病により臥床期間が続いたことで，排泄はおむつにて全介助へと低下した．徐々にうつ症状が改善し，本人から「トイレに自分で行けるようになりたい」との訴えが聞かれるようになった．これに対し，過負荷を考慮した上で，PNF による筋力増強訓練とトイレ動作訓練を施行した．評価はトイレ動作の一連の動作を７相に分け，相ごとに評価した．筋力においては徒手筋力計を用い，筋厚の測定には超音波診断装置を使用した．

【結果】介入４週後から筋力向上を認め，トイレ動作においては介入８週後にズボン・パンツ上げ以外の動作が自立となった．

【結語】遠位型ミオパチーの運動療法では過用症候群に留意した上で訓練を行えば，廃用の改善を含めた筋力増強が可能であると考えた．

8．顔面肩甲上腕型筋ジストロフィー患者の「座りたい」という気持ちに寄り添って
ー危険防止への取り組みを通してー

NHO 天竜病院６病棟
○鈴木彩香，森川息吹，望月博子，
長田好，曽我直子，上野香織

看護師の安全対策を拒否する患者に対しそれ以上の関わりを持とうとしなかったが，患者の危険をそのままにしておけないと感じ，看護師の関わり方を変える必要性があると考えた．先入観を持たず患者をみるため，患者の座位に関する写真を撮り，理学療法士からも情報を得た．そして，患者，看護師，理学療法士で面談し，患者の思いを聴いた．

その結果，転倒の危険に対する患者と看護師間の認識のズレに気づいた．そこで，患者に情報を提供し，患者自身に対策を決めてもらうことで，患者の気持ちを尊重した安全な環境作りを提案でき，受け入れにつながったと考える．
【まとめ】1．「受け入れてくれない」と諦めるのではなく，「受け入れられない」理由に踏み込んで考える．2．患者の話を傾聴し，その思いに寄り添って関わることが受け入れにつながる．

9．ALS患者のニードを満たすための援助を模索して ー排泄・移動の希望があるA氏を通して振り返るー

NHO天竜病院　2病棟
○仲田早織，大石真吾，森　和代，
池田美穂，松下ひとみ，橋口桂子

【目的】ALS患者A氏の訴えを振り返り，ニードの傾向を調べる．
【方法】看護記録よりA氏の訴えを抽出し，ヘンダーソンの14項目に分類，その項目をマズローのニード論の枠組みと対比する．
【結果】総数140中ヘンダーソンの14項目では呼吸30，排泄33，姿勢20，飲食8，睡眠・休息12，清潔4，環境4，コミュニケーション20，遊び・レクリエーション3，学び・発見・好奇心6，マズローのニード論では生理的ニード107，安全性4，所属・愛20，尊重9であった．
【考察】A氏は呼吸機能低下による苦痛と下肢筋力低下による排泄移動時の困難が生じているため，そのニードを満たそうと訴えの多くが生理的ニードであった．しかし，それが満たされない状態でも上位のニードが出現し，そのニードを満たそうと訴えていることがわかった．
【まとめ】生理的ニードを満たしていく中でも，上位のニードにも着目し，A氏の思いを表出できる関係を築いていく必要がある．

10．簡易懸濁法による与薬業務の見直し

NHO東名古屋病院　東3階病棟
○稲葉晴子，檜垣泰子，平嶋　学（薬剤科），若森紀子

【はじめに】
簡易懸濁法とは，錠剤やカプセルをそのまま温湯にいれ，崩壊，懸濁させて経管投与する方法である．この方法は看護業務上でも与薬業務の時間短縮・薬剤確認によるリスク回避・NGチューブ閉塞の回避などの利点が得られるため，当病棟でも2002年頃より導入に取り組み，与薬業務時間の短縮につなげることができた．しかし，簡易懸濁法導入時の手順が残っていないことや，配置換え等で病棟内に簡易懸濁法の担当者が不在となってしまったことで薬剤科との連携が希薄となり，簡易懸濁法の知識や手順・技術はスタッフ同士の伝達のみによって習得されている．その結果，業務の都合上早く溶解させることを目的として，すべての錠剤を粉末状にまで粉砕するという方法がとられるようになってきている．しかし，時間をかけて粉砕を行っていても溶解が不十分でNGチューブが閉塞するという事例が数件報告された．そのため本来の簡易懸濁法の利点が生かされていない現在の簡易懸濁法の実施方法を見直し与薬業務が改善されたため，ここに報告する．

特別講演

「我が国のALS患者臨床像update」

名古屋大学神経内科
熱田直樹

特定疾患臨床調査個人票（個票）データおよび，多施設共同ALS患者前向きコホート研究であるJaCALSのデータを用いて，現在の我が国のALS患者臨床像を示した．個票データから，2008年新規登録例の平均発症年齢は66.2歳であり，1980年代以前の調査に比して高齢化していることが示された．気管切開＋人工呼吸器装着（TPPV）患者割合は約30%，非侵襲的人工換気使用患者は11.3%であり，TPPV患者の実数は7年間で500名程度増加したことが示された．また，経管栄養使用患者は39%を占め，とくに胃瘻使用患者の割合が増加傾向にあった．JaCALSでは効率的な前向き経過観察システムを構築しており，すでに600例のALS患者登録がある．その解析から，発症年齢は，発症から死亡またはTPPV導入までの期間のみならず，球麻痺，上肢機能廃絶までの期間にも強く影響すること，初発症状としての球麻痺の有無は，死亡またはTPPV導入までの期間にはあまり影響していないことなどが示された．